# 「鬼涙村」論

遠藤伸治

牧野信一の代表作といってもよいように思われる作品「鬼涙村」は、次のような極めて印象的な場面から始まっている。

鵙の聲が鋭くけたたましい。萬豊の栗林からだが、まるで直ぐの窓上の空ででもあるかのやうにちかぢかと澄んで耳を突く。けふは晴れるかとつぶやきながら、私は窓をあけて見た。窓の下は未だ朝霧が立ちこめてゐたが、芋畑の向方側にあたる栗林の上にはもう水々しい光が射して、栗拾ひに駈けてゆく子供たちの影があざやかだつた。そして見る見るうちに光の翼は広い畑を越えて窓下に達しさうだつた。芋の収穫はもう余程前に済んで畑は一面に灰色の沼の観で、光が流れるに従つて白い煙が揺れた。萬豊はそこで小屋掛の芝居を打ちたいはらだが、青年団からの申込みで来るべき音戸小唄大会の会場にと希望されて不承無承にふくれてゐるさうだつた。(注)

この冒頭の部分には、立ちこめる朝霧に射す水々しい光、それを背景として栗拾いに駈けてゆく子供たちのあざやかな影、光が流れるに従って白い煙の揺れる芋畑といった、夢のように美しい田園風景が描かれている。しかし、この冒頭の部分に描かれているのは、単に、そうした牧歌的・浪漫的な美しい風景だけではなく、萬豊という奇妙な名前の人物と村の青年団とが、芋畑の使用をめぐって対立関係にあるという極めて世俗的な問題が顔を覗かせている。

子供たちが栗拾いに行こうとしている栗林の、そして村の音頭小唄大会の会場にされようかという芋畑の所有者である萬豊は、村でもかなりの有力者であるように思われる。しかし、彼は、自ら音頭小唄大会といった公共の行事に尽力し、それゆえに人々から尊敬されるような、村の政治の中心となるタイプの有力者ではない。彼が計画するのは、村の外部から役者を呼んで小屋掛の芝居を興行することであり、逆に、音頭小唄大会といった村の共同体としての行事を行おうとする青年団の申し入れに対しては、被抑圧感を味わっている。収穫の終った芋畑を休ませることなく、そして自らも休むことなく、興行という次の計画を考える萬豊を動かしているのは、萬豊というその名の示すとおり、自分の利益を可能な限り拡大しようという経済的欲望である。つまり、萬豊という人物は、経済的には有力者ではあるが、政治的には疎外されているのである。そして、作品「鬼涙村」の冒頭の部分が与える強い印象は、浪漫的な美しい田園風景と、それとは全く異質な、

抑圧・疎外という政治・経済的な問題との対照によるように思われるのである。

続いて、「私」の同居人である御面師という人物と、萬豊との関係が描かれ、政治的・経済的な問題が、はっきりとした形をとり始める。

私と同居の御面師は、とつくに天気を見定めて下彫の面型を鶏小屋の屋根にならべてゐた。私は鋸屑を膠で練つてゐたのだ。萬豊の桐畑から仕入れた材料は、ズイドウ虫や瘤穴の痕が夥しくて、下彫の穴埋に余程の手間がかかつた。御面師は山向ふの村へ仕入れに行くと、つい不覚の酒に参つて日帰りもかなはなかつたから、よんどころなく萬豊の桐で辛抱しようとするのだが、かう穴やふし瘤だらけでは無駄骨が折れるばかりで手間が三倍だと滾しぬいた。今後はもう決して酒には見向かずにと彼は私に指切りしたが、急に仕事の方が忙しくて材料の吟味に山を越える閑もなかつた。萬豊は下駄材の半端物を譲つた。値段を訊くとその都度は、まあまあと鷹揚さうにわらつてゐながら、仕事の集金を自ら引受け、日当とも材料代ともつけずに収入の半分をとつてしまふと御面師は愚痴を滾した。萬豊は凡てにハッキリしたことを口にするのが嫌ひで、ひとりで歩いてゐる時も何が可笑しいのかいつもわらつてゐるやうな表情だつた。では元々さういふ温顔なのかと想ふと大違ひで、邸の桓根を越える子供等を追つて飛出して来る時の姿は全くの狼で、不断はレウマチスだと称して道普請や橋の掛替工事を欠席してゐるにも拘らず、垣も溝も三段構へで宙を飛んだ。御面師は、萬豊から譲られる粗悪な材料では思うように仕事ができないうえに、収入の半分を搾取されていると愚痴を滾している。つまり、共同体との政治的関係においては、抑圧・疎外される者であった萬豊が、御面師との経済的関係においては、抑圧・疎外する者となっているのである。

こうした両者の関係、すなわち、萬豊が御面師を抑圧・疎外するという関係を生じさせている原因は、一つには、酒の誘惑に容易に打ち勝てずに愚痴を滾すような御面師の気の弱さであるが、根本的には、御面師の仕事が急に忙しくなったこと、すなわち御面の需要の急増という状況の変化である。なぜなら、御面の需要が急増し、仕事が忙しくならなければ、御面師は山向うに仕入れに行き、穴やふし瘤の心配もなく御面を作るつもりだったのであり、萬豊のような人物との関係を断つことも可能であったからである。しかし、御面の需要の急増という状況のもとで、その大量の注文に応じようとするならば、材料の吟味に山を越えたり、あるいは下彫の穴埋めに三倍の手間をかけたり、萬豊の思うままにあしらわれてしまうような駆引き下手といった、職人らしい実直な性格では上手くやってゆけないのである。萬豊がいなければ、御面師は大量の注文に応じて御面を作ることも、そして、作った面を多様な人々に売りさばくこともできないであろう。御面師の愚痴は、状況の変化とそれに対応できない職人的自我との亀裂から生まれる不満を発散し、自我を防衛しようとするものなのである。

一方、萬豊にとっては、御面の需要が急増したということが、自分の力を発揮し、欲望を満たすべきよい機会となっている。萬豊は鷹揚な温顔という商売上の表情を身につけているが、それは、ひとりで歩いているときも変らないのであり、偽の自分、こしらえものの仮面といったものではなくなっている。萬豊は、弱い立場にある御面師に対

しても、横柄な態度ではなく、笑顔で接しており、御面という商品を媒介とする関係においては、どのような相手に対しても個人的感情を抜きにした常に変わらぬ温顔で接することができるのであろう。萬豊の温顔は、粗悪な材料を譲り、収入の半分を搾取しながらも、御面師との決定的な衝突を避けて自分が売る御面を御面師に作らせるという経済的関係を維持し、また、道普請や橋の掛替工事といった、直接自分の経済的利益にならない公共の仕事からは逃れながらも、御面は村人たちに売るという経済的関係を維持するためのものとして、すなわち、彼の主な欲望である経済利益の拡大のために必要不可欠なものとして、自動的・無意識的な固定されたものとなっており、つまり、彼の人格の一部となっているのである。

しかし、子供たちを相手にしたときには、日常においては温顔の下に隠され、無意識的に抑圧されている欲望が爆発的に解放され、温顔やリューマチといった対外的な自己像によって調整され、保留されていた対立関係があらわになってしまうのである。

そのうちにもさっきの子供たちがばらばらと垣根をくぐり出て芋畑を八方に逃げ出して来たかと見ると、おいてゆけ野郎共、たしかに顔は知れてるぞなどと叫びながら、どっちを追って好いのやらと戸惑うた萬豊が八方に向って夢中で虚空を摑みながら暴れ出た。萬豊の栗拾ひにゆくには面をもって行くに限ると子供たちが相談してゐたが、なるほど逃げてゆく彼等は忽ち面をかむってあちこちから萬豊を冷笑した。鬼、ひよっとこ、狐、天狗、将軍達が、面をかむってゐなくても鬼の面と化した大鬼を、遠巻きにして、一方を追えば一方から石を投げして、やがて芋畑は世にも奇妙な戦場と化した。

「やあ、面白いぞ面白いぞ。」

私は重い眼蓋をあげて思わず手を叩いた。私の腕はいつも異様な酒の酔ひで陶然としてゐるみたいだったから、そんな光景が一層不思議な夢のやうに映った。

ここで、萬豊は、子供たちを相手にして、日頃は温顔という対外的な自己像の下に隠してきた感情を解放している。一方、子供たちの方も、御面を被ることによって、普段狼のように自分達を追いかける萬豊を思うままにからかっている。そして、「私」は、こうした光景を、鬼やひよっとこ、狐や天狗といった奇妙な姿をした者達が鬼ごっこでもしているような、不思議な夢のように眺め、それを面白がって拍手している。つまり、「私」は、冒頭の部分における夢のように美しい田園風景をさらに延長した、夢幻的な世界の中で、面白がり、拍手をしているのである。

しかし、子供たちが萬豊をからかうこと、また、それを眺めた「私」が拍手するということを、冒頭から夢幻的なものと平行して描かれてきた、現実的なもの、すなわち政治的・経済的な問題と関連させて考えるならば、夢のような光景も全く違った様相を帯びてくるように思われる。

音頭小唄大会といった共同体としての村の行事に関して不満を表わし、また道普請や橋の掛替工事からリューマチと称して逃れる萬豊に対して、村人たちの反感があるならば、萬豊を冷笑し、遠巻きにして石を投げつけるという子供たちの行為は、そうした村の大人たちの萬豊に対する感情の反映であろう。そして、そのように考えるならば、

子供たちの行為には、単に、栗を盗み、萬豊をからかうといったこと以上の、過剰な暴力が感じられるように思われるのである。

そして、そうした子どもたちの行為を眺めて「私」が拍手することも、彼が、いまは酒の酔いによって自意識を喪失してはいても、萬豊に搾取されていると愚痴を滾す御面師と同居し、その仕事を手伝っているということ、あるいは、温顔やリューマチといった対外的自己像の下に狼のような実体を隠している萬豊の偽善的なあり様を知っていることと結びつけて考えるならば、搾取者・偽善者としての萬豊が罰せられることを喜ぶという、御面師や村人たちへの倫理的共感を表明する行為であるように思われるのである。

また、この村には、踊りの晩に、村人の反感を買った人物を担いで、胴上げをしながら走り、それで気絶しない者は村境の川に投げ込むという風習があり、次の踊りの晩に担がれるのが、他ならぬ「私」自身であるという不安が契機となって、続いては、「私」の夢幻的な世界の中の、こうした現実的な問題があらわになってゆくのである。

「今度、踊りの晩に、担がれる奴は、おそらくあの酒倉の居候だらう。」

「畢竟するに、野郎の番だな。」

私を目指して、この恐るべき風評が屢々明らさまの聲と化して私の耳を打つに至つてゐた。あの戦慄すべきリンチは、期が熟したとなれば祭の晩を待たずとも、闇に乗じて寝首を掻かれる騒ぎも珍しくはない。私たちがここに来た春以来からでさえも、三度も決行されてゐる。

現に私も目撃した。（略）突撃の軍馬が押寄せるかのやうな地響をたてて、間もなく秘密結社の一団は、砂を巻いて私の眼界に大写しとなつた。非常な速さで、誰も掛聲ひとつ発するものとてもなく、唯不気味な息づかひの荒々しさが一塊となつて、丁度機関車の煙突の音と聞違ふばかりの壮烈なる促音調を響かせながら、一陣の突風と共に私の眼の先をかすめた。見ると連中は挙つて鬼や天狗、武者、狐、しほふき等の御面をかむつて全くどこの誰とも見境ひもつかぬ巧妙無造作な変装振りだつた。ただひとり彼等の頭上にささげ上げられて鯉のやうに横たはつたまま、悲嘆の苦しみに跪き返り、滅茶苦茶に虚空を摑んでゐる人物だけが素面で、確とは見定めもつかなかつたが、やはり正銘な萬豊の面影だつた。その衣服はおそらく途中の嵐で吹飛んでしまつたのであらうか、彼は見るも浅ましい裸形のなりで、命かぎりの悲鳴を挙げてゐた。たしかに何かの言葉を吐いてゐるのだが、支那かアフリカの野蛮人のやうなおもむきで、まるきり意味は通じなかつた。ただ動物的な断末魔の喚きで気狂ひとなり、救ひを呼ぶのか、憐れみを乞ふのか判断もつかぬが、折々ひときは鋭く五位鷺のやうな喉を振り絞つて餘韻もながく叫びあげる聲が朧夜の霞を破つて凄惨この上もなかつた。と、その度毎に担ぎ手の腕が一斉に高く上へ伸びきると、逞ましい萬豊の体軀は思ひ切り空高く抛りあげられて、その都度空中に様々なるポーズを描出した。徹底的な逆上で硬直した彼の肢体は、一度は鯱（しゃちほこ）のやうな勇ましさで空を蹴つて跳ねあがつたかとおもふと、次にはかつぽれの活人形のやうな飄逸な姿で踊りあがり、また三度目には蝦のやうに腰を曲げて、

やをら見事な宙返りを打つた。そして再び腕の臺に転落すると、またもや激流にのつた小舟の威勢で見る影もなく、拉し去られた、——私は堪らぬ義憤に駆られて、夢中で後を追ひはじめたが忽ち両脚は氷柱の感じで竦みあがり、空しくこの残酷なる處刑の有様を見逃さねばならなかつた。空中に飛びあがる憐れな人物の姿が鳥のやうに小さく遠ざかつてゆくまで、私は唇を嚙み、果ては涙を流して見送るより他は術もなかつた。——それにしても私は、こんな奇怪な光景を眼のあたりに見れば見るほど、見知らぬ蛮地の夢のやうでならなかつた。

やや長い引用となったが、ここで「私」が思い出している「担がれる」というリンチが、先に描かれた、萬豊をからかう子供たちの行為と相似のものであることは明らかであろう。子供たちが、御面を被り、匿名の集団と化すことによって、普段自分たちを狼のように追いまわす萬豊を思うままにからかっているように、ここでの村人たちも、御面を被って匿名の集団と化し、共同体の秩序を乱す萬豊に対する反感を思うままに解放している。

御面を被った村人たちは、息づかいまでが機関車のように一塊となり、掛聲ひとつ発することなく一斉の動作を繰り返すほど一体のものとなっているのに対し、萬豊だけが、素面で悲鳴を挙げ、滅茶苦茶に跳いている。それは、共同体としての集団が萬豊という個人を抑圧・疎外するという点において、冒頭の部分に描かれた、音頭小唄大会の用地として芋畑を貸すようにという青年団の申し込みと同様であるが、そうした日常的・公的な場合には存在したであろう謙譲の姿勢といったものは捨て去られ、萬豊に対する共同体の抑圧・疎外が剝き出しにされている。

音頭小唄大会の用地に、そうした公共の行事に対して消極的な萬豊の土地をわざわざ選ぶということの背景には、おそらく、芝居の興行といった萬豊の計画を抑えつけようという村人の意志が、少なくとも無意識的には存在しているのであろう。そうした、日常的・公的な場合には無意識の領域に抑圧され、あらわにされることのない感情が、御面を被ることによって爆発的に解放されているのである。

つまり、リンチは、共同体の秩序を乱す萬豊に対する反感の暴力的解放であると同時に、そうした感情を剝き出しにすることを妨げている、日常的な秩序と、それを構成している公的・対外的な自己とに対する不満の発散でもある。それゆえに、リンチとは言っても、肉体的暴力よりも、萬豊が被っている日常的・対外的な自己像である温顔という人格・仮面を剝ぎ取り、動物的な姿を剝き出しにするという、人格的な暴力が中心となっているのである。

このように、「担がれる」というリンチと、萬豊をからかう子供たちの行為とは、御面を被って匿名の集団と化すことによって、日常においては抑圧されている感情を解放するという点で、相似のものであり、子供たちの行為もリンチの雛形であるにもかかわらず、両者に対する「私」の態度は全く異なっている。すなわち、萬豊が担がれているのを目撃した時点での「私」は、担いでいる村人たちに対して「堪らぬ義憤」と「竦みあが」るほどの恐れを感じ、担がれている萬豊に同情的であり、「担がれる」というリンチを野蛮だと思うのであるが、子供たちが萬豊をからかうのを眺めている「私」は、萬豊に同情などせず、面白がって拍手しているのである。

こうした「私」の態度の変化は、この村へ来た春以来、このリンチの事情が「私」にもわかってきたこと、例えば、萬豊は利己的な搾取者・偽善者であり、彼が担がれたことにはそれなりにしかるべき理由があったのだといったことが次第に明らかになってきたせいであるように思われる。しかし、こうした事情を薄々感じ取り、萬豊に対する反感という点では村人たちの方に共感するようになりながらも、「私」は、リンチを全面的に認めるまでに至ってはいないように思われる。すなわち、「私」が拍手しているのは、リンチそのものではなく、それと相似のものではあるが子供たちによるリンチの雛形といったものに対してであり、リンチは、酒の酔いによって自意識を失った「私」が、奇妙な御面を被った子供たちが鬼ごっこをしているといった夢幻的な光景を眺めるという形をとって初めて拍手することができるものとなっているのである。

つまり、「私」は、萬豊のような利己的な搾取者・偽善者に対する反感を村人たちと共有するようになりながらも、たとえそういう人間に対してであっても、その人格を剝ぎ取ってしまうような暴力が、春以来三度も振われるような状況に対しては、依然として恐怖や不安を感じているのである。夢幻的な雰囲気は、完全にはリンチに賛同できない自己に対する意識と、リンチが与える不安や恐怖とを、曖昧に隠すことによって、リンチと同様に萬豊のような人間に対する反感を発散させる一方で、リンチ自体には賛同しない、矛盾する自己を防衛することを可能にしているのである。

そして、リンチそのものも、それが含んでいる現実的な対立や、それが与える不安や恐怖を、できるだけ隠してしまうように描かれているように思われる。萬豊が担がれている様子を描いている、誇張され、滑稽化された文体は、確かに萬豊に対する恐ろしい暴力を描きながら、しかし、その恐ろしさやそれが含む問題の現実性を朧化させている。

つまり、現実的な対立関係、政治的・経済的な抑圧・疎外といった問題に気づき始め、共同体の秩序を乱す搾取者・偽善者といった者に対して反感を覚えながらも、同時に、そうした反感の暴力的な発現が頻繁に行われるような状況に対して不安を感じるがゆえに、反感の発現を曖昧な非現実的な形によって行うという「私」の態度は、冒頭の浪漫的な田園風景から、誇張され、滑稽化された萬豊のリンチの様子までの――すなわち作品「鬼涙村」の第一章における、書き手の表現上の態度でもあるのである。

そしてまた、こうした「私」＝書き手の態度は、先に述べた、御面師の態度でもある。御面師も、御面の需要の急増という状況の変化についてゆけず、萬豊に対する反感を覚えながらも、それを酒に酔っての愚痴といった形で表わすだけで、実直な職人的自己像を保持しているのである。

そして、その御面師がついてゆけない状況の変化である御面の需要の急増は、また、「私」が拒否反応をおこす、匿名化した集団による暴力の頻発ということに起因する変化である。なぜなら、御面の注文が増えたのは、単に祭りが近づいたからだけでなく、本来踊りの晩に行われる風習であったリンチが春以来三度も行われ、子供たちにまでその影響が及んでいること、すなわち、自己匿名化を行う村人たちが増えているからなのである。たとえば、御面の注文の増加については、次のように書かれている。

音頭大会の日取は未だ決まらないが、出場者の多くは面をかむらうといふことになつて、日々に注文が絶えなかつた。たとへこれが今や全国的の流行で踊りとなれば老若の別もないとは云ふものの、まさか素面では——とたじろいて二のあしを踏む者も多かつたが、仮面をかむつて、——といふ智慧がつくと、われもわれもと勇み立つた。名誉職も分限者も教職員も自ら乗気になつて出演の決心をつけた。どんな歌詞かは知らぬが鬼涙音頭なる小唄も出来て「東京音頭」の節で歌はれるといふことであつた。

「面をかむつてゐれば、担がれるといふ騒ぎもなくなるだらう——やがては、あの永年の幣風が根を絶つことにでもなれば一挙両得ともなるではないか。」

一方ではかういふ噂が高かつた。

（略）

御面師はそれとなく附近の模様を探つて来て、私に伝へた。

——「今度の秋の踊りまでには出演者は皆な仮面を、そろへようといふことになつてゐるんだから、私たちが居なくなつたら台なしでせうがな。それに近頃また日増に註文が増えるといふのは、何も連中は体裁をつくる仕儀ばかりぢやなくつて、脛に傷持つ方々が意外の数だといふんです。仮面さへかむつてゐれば担がれる心配がないといふところから……」

御面を註文する人々は、まず、社会的な体面、すなわち対外的な自己像を保持しようとする人々である。そうした人々は、その社会的、対外的な自己像を維持するために、おそらくは日常的な社会関係の中から生ずる不満を抑圧しているのであり、御面は、その社会的、対外的な自己像を毀すことなく、抑圧されてきた不満を発散するための、自己を匿名化する手段なのである。そして、その発散は、踊りの晩という非日常的な場で行われるのではあるが、しかし、単なる無礼講の祭りというだけではそれを行うことはできず、抑圧された不満を隠している日常的自己像の上に更に御面をかぶせ、自己を匿名化するという手続きが必要になっている。

すなわち、この村では、閉ざされた共同体のなかでの一日だけの全面解放といった祭り本来の伝統は失われつつあり、抑圧されてきた感情の発散は、御面を被って自己を匿名化し、東京音頭の節にのって全国流行の踊りを踊ることによって、行われているのである。

自己を匿名化することによって、日常においては抑圧されている不満を発散するという点においては、踊りに参加する人々も、リンチを行う人々も、同じである。踊りに参加する人々は、潜在的にはリンチにも参加する可能性をはらんでいる。しかし、抑圧されてきた不満の発散が、リンチという形、すなわち特定の個人への暴力という形をとらず、踊りという曖昧な形で発散されている限り、踊りに参加する人々の態度は、「私」や御面師の態度と同質である。そして、リンチに対する不安という点においても、踊りに参加する人々の多くと、「私」とは一致している。すなわち、人々は、自分こそ次に担がれるかもしれないという不安にかられ、リンチから逃れるために御面を注文するのである。作品「鬼涙村」の第二章から終章である第三章にかけて、「私」をはじめとする、そうした不安にかられた多くの人々が描かれる。

まず、「私」が次に担がれるべき候補者とささやかれるにいたったのは、次のような理由による。

萬豊やJ氏がどんな理由で担がれたものか、私は知らなかったが、人々が私への反感の最初の動機は、J氏の災難の時に、私が見ぬ振りを装ってその場を立去らなかったばかりか、彼に肩を借して共々に引上げて行ったといふのが起りであった。尤もそれが村の不文律を裏切った行為であるといふのを知らなかった者である故、あたり前なら一先づ見逃さるべき筈だったが、日頃から私の態度を目して「大風で生意気だ。」と睨んでいた折からだったので、これが条件として執りあげられ、やがてリンチの候補者に指摘されるに至ったらしいのであるが、私として見るとそれくらいのことで狙はれる理由にもならぬとも思はれた。

「私」がリンチの候補者となった（？）のは、村の不文律を破ったからではない。それは、単なる契機にすぎず、原因は大風で生意気だという「私」の社会的・対外的像にある。もし、村の不文律を破った者をリンチに処するといった、リンチの基準がはっきりしていたならば、「私」の親切は、よそ者の行為として一先ずは見逃されるべきはずなのである。ところが、そうならないのは、萬豊のような村の秩序を乱す人間を、祭りの晩にリンチに処す、といった形での伝統がすでに崩れ始め、リンチの基準が、祭の晩という時の制限だけでなく、曖昧になってしまっているからである。そして、そのために、「私」は、日頃の態度が生意気だといった理由にならぬ理由で担がれるかもしれないという、とらえどころのない不安を感じることとなるのである。

こうした漠然とした不安にとらわれている「私」を、御面師が言葉巧みに力づける。

さっきから御面師は、頻と私を外へ誘ひたがるのだが、私はどうも闇が怖くてたじろいていたところ、そんな風にはなされてみると、たとへ自分がブラック・リストの人物とされていようとも、当分は大丈夫だといふ自信も湧いた。それに踊の頃になったにしろ、そんなに大勢の候補者があると思へば、何も自分が必ずつかまるといふわけでもなからうし、そんな懸念は寧ろ棄てるべきだ、おまけに多くの候補者のうちではおそらく自分などは罪の軽い部ではなからうか——などと都合の好ささうな自惚れを持ったりした。

出歩きを怕がって、萬豊などに使を頼むのは無駄だから、これから二人がかりでそれぞれの注文主へ納め、暫く振りで倉の外で晩飯を摂らうではないかと御面師が促すのであった。

「私」は、不安を感じながらも、御面師に元気づけられて、大丈夫だという自信と、自分など罪の軽い方だという自惚れとを持つ。不安に動揺している「私」を支えようとする御面師の態度は、「私」の友人として当然のもののように思える。しかし、そこには、おそらくは無意識的なものであろう駆引きが、あるように思われる。すなわち、御面師は、「私」を元気づけて連れ出すことによって、御面を納めに行くことについての不安を軽減しようとしているのである。

ところで、この御面師の不安は的中し、まず御面を届けに行った、柳下杉十郎、松二郎という親子の家で、いきなり次のように言われるのである。

「水流（つる）さんや、お前えも余っ程用心しねえと危ねえぞ。丸十の

繁から俺は聴いたんだが、お前えは飛んだ依怙贔負の仕事をしてゐるつてはなしぢやないか、家によつて仕事の仕振りが違ふつてことだよ。」

杉十郎は自分に渡された面をとつて、裏側の節穴を気にした。

「俺ァ別段どうとも思やしないんだが、人の口は煩いからな。」

彼は一度村長を務めたこともあるさうだが、日常のどんな場合にでも自分の意見を直接相手につたへるといふのではなくて、誰がお前のことをどう云つていたぞといふ風にばかり吹聴して他人と他人との感情を害はせた。そして、その間で自分だけが何か親切な人物であるといふ態度を示したがつた。彼も例の黒表の一名だが、おそらくその原因は、その「親切ごかし」なる渾名に依つたものに違ひなかつた。仲の松二郎が亦性質も容貌も父に生写しで「障子の穴」といふ渾名であつた。

杉十郎は、自分の御面の裏側に節穴のあることが不満なのであるが、裏側の節穴が御面の機能を損うわけではない。杉十郎は、経済的関係、すなわち、買い手と売り手というだけの匿名の関係の中で、自分だけが依怙贔負され、疎外されてはいないかという不安を感じているのである。御面の節穴は、大量の注文に応じたために生じたものであり、御面師が故意に節穴のある御面を選んで杉十郎に渡したわけではなく、また、杉十郎もはっきりとした根拠があって不平を言っているのではない。杉十郎の言葉は、漠然とした不安、すなわち不合理で不明瞭な感情に基づいているのである。

杉十郎は、そうした不平を口にしながらも、それを丸十の繁といった他人の名前によっておこない、親切な人物であるという対外的な自己像は保持しようとしている。自己匿名化のための御面の役割を、ここでは他人の名前が果しているのである。杉十郎が村長を務めたことがあるのは、こうした自己像が信用されたこともあったからかもしれない。しかし、今では、親切を装うために、他人の人間関係を害う人物として、逆に嫌われているのである。

こうして、「私」と御面師とが杉十郎親子と対立しているところへ、「法螺忠」という渾名の堀田忠吉が仲裁に入り、「スッポン」という渾名の宇佐見金蔵と共に、「私」たちをひきとめる。彼らは皆、次に担がれるだろうと噂されている連中で、この危機を乗り切り、次の選挙に勝つために謀議していた最中なのである。彼らについて、「私」は次のように思う。

「彼等は自分達が狙はれてゐるのを秘さうとして、俺などを巻添へにするやうだよ。どう考へても俺は自分が彼等より先に担がれようなどとは思はれないよ。」

「無論その通りですとも。奴等の云ふことなんて気にすることはありませんさ。」

私と御面師は、そんなことを話し合ひ、寧ろ萬豊やJ氏が先に難を蒙つたのを不思議としたこともあつた。

私は、囲爐裏のまはりに、偶然にも容疑者ばかりが集つたのを、改めて見廻した。そして、人の反感や憎念をあがなふ人物といふものは、その行為や人格を別にして、外形を一瞥したのみで、直ちに堪らぬ厭味を覚えさせられるものだと思つた。人の通有性などといふものは平凡で、そして的確だ。私にしろ、若し凡ての村人を一列にならべて、その中から全く理由もなく「憎むべき人物」

を指摘せよと命ぜられたならば、やはりこれらの者共と、そして萬豊とJを選んだであらうと思はれた。

「私」が感じているのは、杉十郎達の野心や村政上の対立の巻添えをくって自分が担がれはしないか、自分を仲間に引き入れ、自分を矢面に立たせることによって杉十郎達はリンチから逃れようとしているのではないか、という不安である。そうした不安を感じている「私」にとっては、彼らこそ絶対に担がれるべき人間に思えるのである。彼らが憎まれる原因である、政治的な野心と対立、他人と他人との感情を害わせるような行為、親切ごかしの偽善者という人格などといったものをひとまず別にしても、彼らは人々に憎まれるべき存在であると、「私」は理由なしに思うのである。「私」には杉十郎たちが次のように感じられる。

杉十郎と松は父子の癖に、まるで仲間同志の口をきき合い、折りに触れては互いにひそひそと耳うちを交して点頭いたり冷笑を浮かべてどうかすると互ひの肩を打つ真似をした。親密の具合が猿のやうだ。父と子であるからには余程の年齢が相違するだらうにも拘らず、二人とも四十くらいに見え、言語は聞直さないといかにも判別も適はぬ不明瞭さで、絶間もなくもぐもぐと喋り続けるにつれて口の端に白い泡が溢れた。そして、手の甲で唇と舌とを横撫でして、おまけにその手を何で拭はうとするでもなく、そのまま頭を掻いたり肴をつまんだりした。指の先は始終こせこせとして皿や小鉢を他人のものも自分のものもちよつちよつと位置を動かしたり、いろいろの食ひものをほんの豆の端ほど嚙んで膳の縁に置き並べたり、その合間には小楊枝の先を盃に浸して膳の上に文字を書いた。癖までが全く同じやうで、松が時々差挾む「阿父さん」といふ声に気づかなければ、双児のやうだつた。

ここで、杉十郎父子は、生理的・感覚的に嫌悪を感ずべき存在とされている。それは、理屈を超えたものであり、どうしようもない絶対的な真実であるかのように思われる。しかし、こうした嫌悪感も、基本的には「私」の不安に基づいたものであり、つまるところ、「私」に不安を生じさせる状況によるものである。「私」が嫌悪を感じているのは、父子の親密さの与える、自分も巻き込み、自分に伝染してきそうな不潔感である。こうした「私」の嫌悪感を、杉十郎達の存在が本質的に持つものとして絶対化するにいたって、「私」は、ようやく、理由にならぬ理由によってリンチを行う村人たちに、はっきりと共感するのである。そして、そうした眼で見ると、「私」自身も、また御面師も、次のようなものになってしまう。

鏡の中に映ってゐる自分の姿は、折角人がはなしかけてもむつとして、自分ひとりが正義的なことでも考へてゐるとでもいふ風なカラス天狗泌みた独りよがりげな顔で、ぽつと前を見詰めていた。（略）――私は、次々と自分の容子を今更鏡に写して見るにつけ、人の反応や憎念を誘ふとなれば、スッポンや法螺忠に比ぶべくもなく、私自身としても先づ、こやつを狙ふべきが順当だつたと合点された。（略）それにつけて私はまた鏡の中で隣の御面師を見ると、狐のやうな不平顔で、はやく金をとりたいものだが自分が云ひ出すのは厭で、私をせき立てようといらいらして激しい貪乏ゆすりを立てたり、キョロキョロと私の横顔を窺つたりしてゐるのが悪感を持つて眺められた。彼はこの卑怯因循な態度で終ひに

人々から狙はれるに至つたのかと私は気づいたが、不断のやうに敢て代弁の役を買つて出ようとはしなかつた。そして私はわざとはつきりと、

「水流舟二郎君、僕はもう暫くここで遊んでゆくから、若し落着かないなら先へ帰り給へな。」と云つた。

「私」は、リンチを行う匿名化した人々とは違う、リンチに完全には賛同できない自己を、リンチを呼び起こすに足る独善的で傲慢な、憎むべき存在とするにいたる。そして、今まで自分の陰に隠れていた御面師を前面に押し出して、逆に自分を隠し、自己を匿名化することによって、不安から自分を守ろうとするのである。しかし、守るべき自己は、疎外された、憎むべきものでしかなく、また、そうした態度によって、「私」は御面師との関係すら失ってしまうのである。

作品「鬼涙村」は、こうした残酷な形で終るのである。

以上、見てきたように、作品「鬼涙村」に描かれているのは、共同体的なものの崩壊の過程であると言ってよいと思われる。たとえば萬豊のような人物は、共同体を維持している秩序を巧みにくぐり抜けて経済的利益を追求することによって、その秩序を乱す。彼は、共同体を解体する経済的なもののシンボルとして見ることができる。売り手と買い手といった匿名の経済的関係の中に、伝統的な人間関係は希薄化し、人々は不安にとらわれるのである。しかし、日常的な秩序が維持されている限り、それをくぐりぬける萬豊を充分に罰することはできない。そこで、人々は、担ぐという伝統的な非日常的行為によって萬豊を罰し、鬱憤を晴らすとともに、共同体的一体感を回復しようとするのである。

こうした状況下で、「私」は、村人たちの行為を単に野蛮だと恐れていたのであるが、次第に、萬豊のような偽善者・搾取者が罰せられることに共感を覚えるようになる。そして、一方では恐れ、同時に共感するという分裂した状態の中で、美しい田園風景や、その中で遊ぶ無邪気な子供、酒の酔い、また、誇張し滑稽化して眺めることなどによって、おそろしい現実を夢幻化し、分裂した自己に対する自意識を失い、一時的な均衡を保つのである。

しかし、萬豊のような人物を担ぐといった方法は、不安の一時的な解消にはなっても、共同体の崩れを止めることはできず、むしろ、結果的には、崩れをさらに進めてしまう。萬豊のような人間を次々と担ぐことによって、担ぐということが、次第に、日常化してゆく。また、村の掟に対する明らかな違反ゆえに担がれるのではなく、理由のない反感や猜疑心や噂が表に出てきて、どのような人物が担がれるのかという担ぎの基準が曖昧になってしまう。こうして、「私」をはじめとする、多くの人々が、担がれるかもしれないという不安にとらわれ、自分に対する他人の感情や、噂といったものに動かされやすくなっていくのである。そして、共同体は崩壊へむかって進む。

こうした不安定な状況の中では、それに適応し、それを政治的野心のために利用しようとする杉十郎たちのような人間も出てくる。彼らは、人々の不安につけこんで、政敵に対する反感を煽動し、自分の支持を増そうとするのである。しかし、彼らも不安から逃れられるわけではなく、政治的野心のために他との人間関係を害う者として憎まれ、担がれはしないかという不安におちいる。彼らの政治的な野心や駆引

きも、ある政敵への敵対運動を通して、一致団結という確かな人間関係を結ぶことによって、自分を守ろうとすること、すなわち不安の表われと見なすこともできる。

また、杉十郎たちに対する「私」の絶対化された嫌悪感も、すでに述べたように、やはり同様に、自己を不安から防衛しようとするところから生じたものであると思われる。この点において、「私」も杉十郎たちと同様なのであり、そのために、杉十郎たちに対する絶対的な嫌悪を、自分自身に対しても感じざるをえないのである。

以上が、鬼涙村の社会的実相であると考えるのだが、それはすなわち、この作品が書かれた時期の日本全体の状況でもあったのではないかと思われる。鋭敏な詩人牧野は、おそらくは無意識的に、その実相にみごとな表現をあたえたのであっただろう。

現代の我々が、この作品に興味をそそられるのは、我々もまた、種々の対立を生み出しうる複雑な人間関係の中に生活しており、その中で均衡を保ち、自己を守るために、いろいろな形で自己の匿名化を行っているからであろう。我々もまた、ある時は自分自身の不満を自ら無意識の中に抑圧し、またある時は、匿名の関係の中でそれを発散し、さらに、そうした不満の標的となることを避けるためにも自己を匿名化しているように思われる。こうしたことは、現代においてより複雑化し、そこから生じる不安ゆえの理由のない暴力といったものも、はるかに日常化しているように思われる。こうした現代社会に生きる我々にとって、作品「鬼涙村」は、牧野信一にとっての夢や農村がそうであったように、現実的な不安が存在しながらも、それをおもしろおかしく見せてくれるものとして、魅力を持つのであろう。

〔注〕以上の引用は『牧野信一全集』（人文書院）によったが、その際旧漢字は新漢字にあらためた。以下の引用も同様。